

# ツバキの1芽挿について

後藤利幸・西村和明

(大分県温泉熱利用農業研究所)

GOTO, T. and NISIMURA, K.

Studies on the Eye Cutting of Camellia japonica L.

ツバキの挿木(露地)は6~8月、新梢15~20cm着葉数2~3枚で行なうのが普通である。穂木が多数得られる場合は問題はないが、穂木が少ない場合や優良種を短期間に多量に増殖する場合は効率的でない。したがって多量繁殖の一方法として1芽(1葉)挿が考えられる。この方法はすでに一部で行われているが、本報では挿木後の活着率、移植後の生育状況について調査したのでその結果を報告する。

## I. 試験材料および方法

供試品種は乙女と明石瀉を用い、1967年7月挿木1968年、1969年の2回それぞれ調査した。穂木は新梢の先端の第1葉をI、第2葉をIIとし順次第5葉まで使用した。用土は赤土を使用して露地挿とし、日覆やその他の管理は慣行法に準じた。標準区は穂木の長さ15cm、着葉数は3枚とした。

## II. 試験の結果および考察

挿木後の生存数は第1表の通り1年目の調査では乙女、明石瀉ともに高い活着率を示し、処理区間の差はほとんど認められなかった。2年目における生存数は乙女が平均86%、明石瀉が90.8%で乙女がやや少なかった。処理区間ではIが特に少なく、II~Vの差はほとんど認められなかった。

1年目における生育の状況は第2表の通りで草丈

はII、IIIが高くIV、I、Vの順であった。このことは挿木時の穂木の長さによるものと考えられる。葉数、分枝数、根長の差は少なかった。

2年目の生育は第3表の通りII、IIIは初年度と同様もっとも高く、Iがもっとも低かった。初年度に対する2年目の生育量を草丈についてみると乙女では平均4.3倍、明石瀉では3.1倍となり処理区ではIV、Vが特に高かった。IV、Vは挿木当時穂木が短かく芽も小さいのに生育がよいのは穂木の充実度がよくそのことが後の生育に関与するものと思われる。したがってかなり下部の芽も挿木が可能であることが明らかとなった。

1芽挿の生育、特に草丈、葉数については2年苗で標準区の1年苗にほぼ匹敵することが認められた。

以上、活着率、生育の状況から考察して1芽挿でも充分実用性が高いことが認められる。

第1表 挿木後の生存数

品種	処理	挿木数	1年目		2年目	
			生存数	%	生存数	%
乙女	I	25	23.5	94.0	17.5	70.0
	II	25	25.0	100	22.5	90.0
	III	25	25.0	100	23.0	92.0
	IV	25	24.5	98.0	21.5	86.0
	V	25	25.0	100	23.0	92.0
	平均標準	25	24.6	98.4	21.5	86.0
明石瀉	I	25	25.0	100	21.5	86.0
	II	25	25.0	100	23.0	92.0
	III	25	25.0	100	22.0	88.0
	IV	25	25.0	100	24.5	98.0
	V	25	25.0	100	22.5	90.0
	平均標準	25	25.0	100	22.7	90.8

※1967年挿木、1968、69年調査

第2表 第1回調査時の生育状況(1968)

品種	処理	調査数	草丈 cm	旧枝長 cm	新枝長 cm	根長 cm	旧葉数	新葉数	分枝数	挿木時の穂木の長さ cm	挿木時の穂木の状態 芽の大きさ
乙女	I	24.5	2.6	1.2	1.4	10.6	1.0	0	1.2	2.4	11.2mm
	II	24.5	4.5	2.3	2.3	14.6	1.0	0.3	1.0	3.3	7.6
	III	25.0	4.2	2.8	1.6	13.1	1.0	0.2	1.0	2.9	4.1
	IV	24.0	2.9	2.5	0.7	14.3	1.0	0	1.0	2.2	1.8
	V	25.0	3.0	2.6	0.7	14.9	1.0	0	1.0	2.2	1.0
	平均標準	—	3.4	2.3	1.3	13.5	1.0	0.1	1.0	2.6	5.1
明石瀉	I	25.0	4.1	2.0	2.1	12.8	1.0	0	1.0	2.7	11.1
	II	25.0	5.2	3.3	2.1	12.9	1.0	0.3	1.0	3.7	6.5
	III	25.0	5.7	3.4	2.6	15.0	1.0	0.4	1.0	3.4	5.3
	IV	25.0	4.1	2.8	1.7	13.6	1.0	0.2	1.0	2.7	2.5
	V	25.0	2.8	2.6	0.3	13.6	1.0	0.1	1.0	2.5	1.1
	平均標準	—	4.4	2.8	1.8	13.6	1.0	0.2	1.0	3.0	5.3

第3表 第2回調査時の生育状況(1969)

品種	処理	調査数	草丈 cm	1年目に対する増長率	旧枝長 cm	新枝長 cm	根長 cm	旧葉数	新葉数	分枝数
乙女	I	17.5	10.5	4.0倍	8.1	2.5	15.0	3.2	2.5	1.3
	II	22.5	15.7	3.5	12.3	3.5	20.3	5.6	4.7	2.6
	III	23.0	16.0	3.8	13.0	3.1	18.9	5.9	4.1	2.5
	IV	21.5	14.8	5.1	12.1	2.8	19.2	3.9	3.1	2.6
	V	23.0	15.5	5.2	11.7	3.7	20.1	3.8	3.8	2.5
	平均標準	—	14.5	4.3	11.4	3.1	18.7	4.5	3.6	2.3
明石瀉	I	21.5	9.9	2.4	4.8	5.2	22.3	2.3	3.5	1.4
	II	23.0	16.2	3.1	9.9	6.3	20.3	5.3	4.7	1.4
	III	22.0	15.8	2.8	11.2	4.6	20.8	4.6	3.8	1.1
	IV	24.5	14.5	3.5	9.0	5.4	21.2	4.6	3.4	1.3
	V	22.5	11.0	3.9	6.9	4.1	20.5	2.7	2.1	1.3
	平均標準	—	13.5	3.1	8.4	5.1	21.0	3.9	3.5	1.3